

誰もがハマる！ 管楽器

「難しそう」「すぐに音が出なそう」「今から始めても遅いのでは」
こうした心配は無用。管楽器は誰でも気軽に楽しむことができ、
中高年が新たに始める趣味としてもおすすめです。
その6つの理由を紹介しよう。



1 基本構造は単純な 一本の「くだ」

現代の管楽器にはさまざまな装置や機能が付いているが、管楽器の基本構造は一本の単純な「くだ（管）」。発音の仕組みもシンプルで、多くの管楽器は基本的に自分の息を吹き込めば鳴らすことができる。難しく考えず、楽器店の試奏体験などで実際に吹いてみてほしい。

2 比較的早く 上達しやすい

ピアノやバイオリンは小さな頃から訓練しないと上達しづらいといわれるが、管楽器は中高年になってから始めても比較的早く上達できる。とりわけサクソフォンは指使いがリコーダーとよく似ており、他の管楽器と比べて演奏しやすく、中高年の趣味として人気がある。

3 肺活量に自信が なくても大丈夫

そもそも肺活量とは「肺の容量」ではなく、肺を一番ふくらませたときと、しぼめたときの差であり、「肺を生かす量」を意味する。これを意識して息を吹き込む練習を続ければ、肺活量に自信がない……という人でも管楽器を大きな音で吹き鳴らすことができる。

4 「自分の音」を 深化できる

楽器自体が音色を左右するピアノやギターとは違い、息がそのまま音になる管楽器は、同じ楽器を演奏しても奏者によって音色が異なる場合が多く、奏者の感情が色濃く反映されるといわれる。慣れてくれば「自分の音」を作り上げ、それを深く育てる喜びが味わえる。

5 身近な仲間と 合奏しやすい

管楽器というと大編成の吹奏楽をイメージする人が多いかもしれないが、小編成のアンサンブルも柔軟に楽しめる。管楽器同士はもちろん、鍵盤楽器や弦楽器との組み合わせも可能であり、身近な音楽仲間と気軽に音を合わせることで日常生活を豊かに潤すことができる。

6 音楽ジャンルを 問わず活躍できる

吹奏楽やクラシックをはじめ、ジャズ、ロック、ポップス、ラテンなど、ジャンルを問わず演奏できることも管楽器の懐の深い魅力。ギターはフォークとエレキで演奏するシーンが限られる場合があるが、管楽器は基本的にどんなジャンルでも同じ楽器を演奏できる。

「息を吹き込む楽器」は健康増進にも有効



クラシック音楽に精通され、フルートの演奏経験もある医学博士・工学博士の藤本幸弘先生（東京・半蔵門のクリニックF院長）にお話をお聞きました。

管楽器には「ウェルエイジング（健康的な加齢）」の観点から注目すべき要素がいくつもあります。まず挙げられるのが呼吸。管楽器を演奏するときには息を深く吸い、一定の圧力を保ちながら長く吐き続けます。加齢とともに呼吸筋や横隔膜の働きは低下しやすくなりますが、自然に呼吸を意識する機会が増え、呼吸機能を高める効果があります。さらに深い呼吸はリラックス時に働く副交感神経との関係が深いと考えられており、自律神経の「オン」と「オフ」を切り替えるきっかけにもなり得ます。心身を落ち着かせる時間を持つことは、健やかな毎日を送るうえでも大切です。

また、管楽器は音色や音程をコントロールするために、口や舌、頬、唇の周囲の筋肉を繊細に使います。口腔周囲の機能を日常的に使うことは、表情の豊かさや発声のしやすさにつながる可能性があり、人とのコミュニケーション

ションもより楽しめるようになるのではないのでしょうか。さらに管楽器演奏では正しい姿勢も重要。背筋を伸ばし、胸郭を広げて呼吸する姿勢が求められるため、自然と身体の使い方への意識が高まります。姿勢が整うことで、見た目の若々しさにつながるかもしれません。

脳の働きを向上させるという点でも、管楽器は魅力的です。楽譜を読み、指を動かし、呼吸を調整しながら音楽を表現する作業には、多くの神経回路が関わります。特に演奏技術の習得には反復練習が欠かせません。最初は意識しなければできなかった動作も、練習を重ねるうちに脳が学習し、自然に行えるようになっていきます。こうした「身体が覚える」感覚を体感できることは、管楽器演奏の醍醐味のひとつでしょう。

最後に、忘れてはならないのが人とのつながりです。管楽器にはアンサンブルや吹奏楽など、誰かと音を合わせる楽しみがあります。退職後や子育て後など、社会との接点が減りがちな時期に、新しい仲間や目標を持てることは大きな価値があり、何よりも新しい挑戦によって「年齢を重ねても成長を実感できる喜び」が健康的な人生を支えてくれるはずですよ。

息吹が奏でる感動のオト ―ヤマハ管楽器60周年―



2022年 シンセティックリード「CLR/ASR/TSR」シリーズ発売。



2026年 子どものためのプレトランペット、カジュアル管楽器「Trova™」発売。



2005年「Custom」トランペット「YTR-9445CHS」発売。

2024年「62」シリーズにアンバーラッカーとアンラッカーを追加したアルトサクソフォン「YAS-62A/UL」、テナーサクソフォン「YTS-62A/UL」発売。



2017年 カジュアル管楽器、ヴェノヴァ「YVS-100」発売。



2001年「Custom」ユーフォニアム「YEP-842S」発売。



2020年 デジタル管楽器、デジタルサクス「YDS-150」発売。

第一号機となるトランペットの発売から60年。最初は欧米に学び、技術と経験を積み上げ、そこに最新テクノロジーを融合させることで、ヤマハは革新的な管楽器づくりに挑み続けてきた。

管楽器とヤマハ① ヤマハ管楽器60周年

写真でたどる挑戦と革新の軌跡

1978年 サクソフォン「Professional」シリーズのユージン・ルソー氏(元インディアナ大学教授)改良モデル2機種(アルトYAS-62/ソプラノYSS-62)発売。



1967~69年 各楽器の「Professional」シリーズを発売し、ラインアップ拡充。



1991年 米国の世界的奏者、ボビー・シュモデルのトランペット「YTR-6310Z」発売。



1970年 トランペットのハイエンドモデル「Custom」シリーズ19機種発表。



1995年 サイレントプラス™第一号「SB7」(トランペット用)発売。



1973年 ハンドメイドフルート「YFL-61/63」発売。



1966年 ヤマハブランドの管楽器一機種、トランペット「YTR-1」発売。

1967年 ヤマハブランド初のサクソフォン「YAS-1/YTS-1」発売。

2026 2020 2010 2000 1990 1980 1970 1966



2019年 フランスに「ヤマハアーティストサービスバール」を開設。



2008年 ロサンゼルスに「アトリエ」開設。



2000年 中国で管楽器生産開始。



1995年「浜松国際管楽器アカデミー&フェスティバル」スタート。



1986年 ウィーンに「アトリエ」開設。



1972年 ユージン・ルソー氏を技術顧問に迎え、サクソフォンの開発・改良スタート。



1977年 アーティストとの共創拠点となる「アトリエ」が東京・銀座にオープン。



1966年 元シカゴ交響楽団奏者で、トランペット製造会社を営んでいたレナード・シルキー氏を技術顧問に迎え、金管楽器の開発・改良に着手。



2016年 ヤマハ管楽器50周年。



2010年 ヤマハ吹奏楽団創立50年。



2005年 管楽器生産累計1,000万本を突破。



1973年 管楽器リペアスクール(現ヤマハ管楽器テクニカルアカデミー)開校。



1991年 ウィーン・フィルからヤマハに楽器開発への感謝状が贈られる。



1967年 米国シカゴの楽器見本市NAMM Showで管楽器発表。



1970年 豊岡工場が操業開始。ヤマハ管楽器生産の中心となる。

管楽器の醍醐味は アンサンブルにあり!

プラス・ジャンボリー with キララバンド
(6月20日:東京・S&D秋川キララホール)

楽器経験の長さやレベルに関係なく、“吹奏樂が好きだ”という熱い思いを共通言語に集まって大合奏を楽しむイベント「プラス・ジャンボリー」。今回は東京・あきる野市で開催され、一期一会の特別な感動が生まれた。

text by Ryuiichi Yamazaki
photos by Takako Miyachi

「みんなで楽しむ大合奏」

日本は世界でも有数の吹奏樂大
国。大勢で合奏する楽しさを学生
時代に満喫したという方も多いは
ず。一方で、卒業した後は仕事が忙
しかったり、大きな音で楽器を吹け
る住宅環境ではなかったり、参加で
きる社会人バンドが周囲になかった
り、さまざまな事情により演奏の機
会を失ってしまう人が多いのも事実
である。

全国に数百万人と存在する管楽器
経験者が、継続して演奏活動を楽し
み、再び楽器を手にする場所を作り
たい。そして、管楽器に憧れている
方たちに向けても吹奏樂の魅力を体
験してもらえる機会を提供したい。
そんな思いから、ヤマハは一九九〇
年代後半より全国に展開する特約店
と協力しながら、管楽器によるアン
サンブルを体験できるブラバンイベ
ントを開催してきた。その中でひ
と際大きなインパクトを放つのが、
二〇一〇年に始まった「プラス・ジャ
ンボリー」だ。「みんなで楽しむ大合
奏」を合言葉とし、横浜の大きな橋
ホールを舞台に定期開催され、子ど
もからシニアまで世代を超えて毎回



俳優としておなじみの柳沢慎吾さんは、今、トランペットに夢中だ。日々楽器とどのように向き合っているのかを聞いた。

text by Kazumi Serizawa



「この音だ！」の 感覚が最高に気持ちいい

単独ライブ「THE 柳沢慎吾劇場」でトランペットを独奏。

映画やドラマ、バラエティーなどで幅広く活躍する柳沢慎吾さん。テレビ朝日の人気番組から生まれた『高嶋ちさ子のザワつく!音楽会 2024』への出演を機に、六十二歳にしてトランペットを吹き始めた。出演依頼をどう受け止めたのだろうか。「触ったことも吹いたこともないし、そんないきなり吹けないよ、と思いました。どうしようかと迷いつつ打ち合わせに行ったら、いろいろな楽器が用意されていて、いくつか試したんです。その中で、最初にマウスピースだけで音が出て、次に楽器に挿しても音が出たのがトランペットだったんです。そしたら番組スタッフが、いけますね、トランペットいきましようよって、あれよあれよって間に決まっちゃって(笑)」

最初から伸びのある音が出たというトランペット。それを見ていたトランペットの講師がさっそく、「何の曲を吹きたいですか?」と尋ねた。「いきなりですよ、ドレミも吹けないのに。でも『栄光の架橋』って言っちゃった(笑)。こんな突然のスターから、四か月ちよつとで大阪城ホールで吹いたなんて、自分でも驚いています」

懸命の演奏が生んだ感動

本番に向けては「一日でも練習を休むと吹き方を忘れてしまう」と、仕事の合間にも時間を作って練習。夜に帰宅した日はピックアップミュートをつけて練習した。頑張り過ぎて口が痛くなったことも。また、例年八月は高校野球観戦に集中するため、練習も休みがちに。しかし「こう見えて真面目なんです」という慎吾さん、練習の遅れをしっかりと取り戻し、十月の本番を迎えた。

出番直前、舞台袖ではとても緊張したというが、そこはベテラン。ひとたびステージに出たら、落ち着いて演奏できたという。

「伴奏に乗って自分が吹き始めた瞬間、きれいな音がホールに響いてすぐ気持ちよくなりました。演奏時間は六分ちよつとだったんですけど、間奏で感極まってしまって、客席を見たらお客さんも泣いていて、それ見てまた胸が熱くなりました」

演奏後、舞台袖で慎吾さんを迎えたスタッフたちも、全員泣いていたという。

「感動しましたね。プロ奏者みたいなうまい演奏ではないけれど、一生懸命に吹く姿が感動を呼んだのでしょ

ね。最後まで吹き切れて本当に嬉しかったです」

続く『高嶋ちさ子のザワつく!音楽会 2025』では『川の流れるように』に挑戦。それは、美空ひばりファンで九十一歳になる母からのリクエストだった。

「これまた名曲で、多くの人が知る曲。しかも去年は日本武道館での公演もあったので、よけいにプレッシャーでした。いよいよ出番というところでちさ子さんが曲紹介をしたとたん、『ウォォー!』っていう会場のどよめきがものすごく、舞台袖で足が震えました。いつものように登場したんですが、曲の頭でうまく音が出なくて、でも伴奏は続いているし、お客さんはペンライトを振っているし、そのまま吹き切りました。自分ではその日の演奏に納得はできませんでした。でも千秋



「高嶋ちさ子のザワつく!音楽会」に2024年から出演。2026年は観客のリクエストに応じて『いとしのエリー』を演奏する予定だという。

いくつになっても

挑戦するのは

いいことだと思っています